砥部分校関係の御意見と県教育委員会の考え方

①

「学校に行きづらい生徒のためにも、砥部分校を存続させてほしい。」

砥部分校はデザインを学びたい生徒のための学校であり、「学校に行きづらい生徒」のために設置している学校ではありません。
砥部分校に限らず、不登校生徒など学校に行きづらい生徒のケアについては、全ての県立学校において個別に丁寧に行っています。

○中学校で学校に行きづらい経験をした生徒等に学び直しの機会を設けるために設置したいと計画しているのが、「愛媛風早高校（仮称）」です。
○同校は、働きながら学びたい生徒はもとより、下記のような多様な背景を持つ生徒等に選んでもらうことを想定しています。
・不登校を経験し、高校進学を機に学び直しをしたい生徒
・起立性調節障害など朝起きられない症状を抱えながら学校に通いたい生徒
・決められた時間割に縛られず、自分のペースで学びたい生徒

②

「ものづくりは、人との出会いが大事で、砥部は脈々と焼き物をつくる風土がある。小規模校で、人と触れ合うことについては、いい面もある。」

本県を代表するものづくり砥部焼の里にデザイン科が設置されていることは、その親和性から意義のあることと理解しています。
しかしながら、現在はかつてと比べ、砥部焼との関連性は希薄化しており、このまま砥部町で存続させても発展する可能性が乏しい中、県下唯一のデザイン科を存続・発展させるための方策として、伊予統合案を提示しています。

○１学級の砥部分校をこのまま存続させたとしても、近い将来に募集停止となる事態が想定され、結果としてデザイン科がなくなり、砥部焼を学ぶ場もなくなってしまう恐れがあります。
○小規模校にもメリットがあることは承知していますが、教科指導や部活動、学校行事などで大勢の仲間と交流し、社会に出る知識や経験を積むという面で、デメリットが大きいと考えています。

③ **「通学が不便でも、砥部分校には、県外からも生徒が入学している。広域から生徒が入学していることも、評価してほしい。」**

通学条件が良い伊予高校に移設することで、さらに多くの生徒にデザインを学ぶ機会を提供するための案です。

○県内には、デザインを学びたい生徒、デザイン系の学校に進学したい生徒が、もっと多くいると考えています。

○県内市町や県外から、デザインを学びたい生徒が砥部分校に入学していることは承知していますが、交通の便がよい伊予高校にデザイン科を設置することで、さらに多くの生徒にデザインを学ぶ機会を提供できるようになると考えています。

○伊予高校に新設する理数情報科や、拡充する普通科の芸術クリエーションコースと連携することで、デザイン科での学びや視野が広がり、将来進むべき進路や活躍する世界への道がもっと大きく開けると期待しています。 ※詳しくは８ページをご覧ください。

○砥部焼関連施設を含めた砥部分校の施設群は伊予高校に移設又は新築するほか、陶芸関連のコースや教育は維持します。また、全校生徒を対象に砥部焼に関する授業や活動を実践し、砥部焼への理解を広めるとともに、砥部町とのつながりも密に保ちます。

○多様な視点を持つ生徒と日常的に交流できる環境を作るため、普通科、デザイン科、理数情報科による「ミックスホームルーム制」を採用することも検討しています。

④ **「学校のニーズを調査する際に、なぜ高校生にアンケート調査をしなかったのか。」**

これから高校に進学する中学生と保護者の意見が最も大切であると考えているからです。

○これから高校に進学する生徒の意見を重視するため、公立中学１・２年生及びその保護者を対象としたアンケート調査を実施し、その結果も参考にしながら計画案を策定しました。

○高校生については、現在の学校に魅かれて入学してくれた方たちであり、学校が責任をもって卒業まで導きます。

○学校の将来像の議論について、高校生は他の卒業生を含めた方々と同じ立場となることから、パブリックコメント等で意見を表明してほしいと考えています。

⑤ **「砥部町から砥部分校がなくなったら、地域にどのような影響があるのか考えているのか。」**

今回の計画案は、これから高校進学を目指す子供たちのことを第一に考え、そのために学校はどうあるべきかという視点を重視して作り上げてきました。
町の賑わいや産業振興はとても重要なことですが、それを考え担うべきは大人の責任であり、生徒や学校はそのお手伝いはできますが、何かを犠牲にしてまで担うべき役割ではないと考えています。

○地域への影響については、過去３年間を見ると、
・砥部中学校卒業生のうち砥部分校進学者数平均
　約５人／約190人
・砥部分校生のうち陶芸コース選択者数平均
　約４人（うち砥部中学校卒業生約１人）／約37人
・砥部分校卒業生のうち砥部焼関係就職者数合計
　１人／117人
などの現状を踏まえて考える必要があります。

⑥ **「砥部分校を計画のキーポイントにしたほうがいい。砥部分校に足りない交通手段、寮などを整備していただけると、２学級になると思う。」**

県が、寮などを整備することは考えていません。

○高校は、中学校までとは異なり、様々な条件を勘案したうえで自分で学校を選択して通うこととなります。交通事情も変化し、通学可能な範囲も拡がっているため、県が寮を整備することは考えておりません。

小規模校が特色ある教育活動を展開し、近隣や全国から生徒を募集するためには、地元自治体や地域からの支援・連携は不可欠です。学校存続のための生徒募集に係る取組については、地域や自治体から様々な温かいご支援を受けています。

（取組の例）
○町営寮の設置・・・上浮穴高校など３校
○公営塾の運営・・・弓削高校など７校
○給食の提供・・・・大三島分校など９校
○通学費補助・・・・三崎高校など11校

⑦ **「今回の計画案について、２年かけて協議したと聞いているが、全く知らなかった。町議をはじめ、町民も学校も知らないのはおかしい。」**

検討委員会や地域協議会の開催結果については、その概要をＨＰや新聞報道でその都度周知してきました。また、地域別計画こそ７月の公表となりましたが、適正規模や魅力化推進校制度など、計画の肝となる部分は決定後速やかに公開してきています。

○具体的な地域別計画は、限られた地域の代表者と非公開で策定作業を進めてきました。これは、生徒数の将来データや生徒の志望傾向などを詳細に分析し、それを基に冷静かつ客観的な見地からしっかりとした計画案を作り上げ、それを県民の皆さんに示すことが、行政としての当然の責務であると考えたからであり、ご理解をお願いします。

○３～８学級の適正規模や、条件を満たした場合に１市町１校に限り認定できる魅力化推進校制度については、昨年８月の中間報告でお示したほか、新聞等でも報道されています。

⑧ **「統合後の伊予高校は、アートとサイエンスが融合した教育を実践するとあるが、他県での成功事例などモデル校はないのか。」**

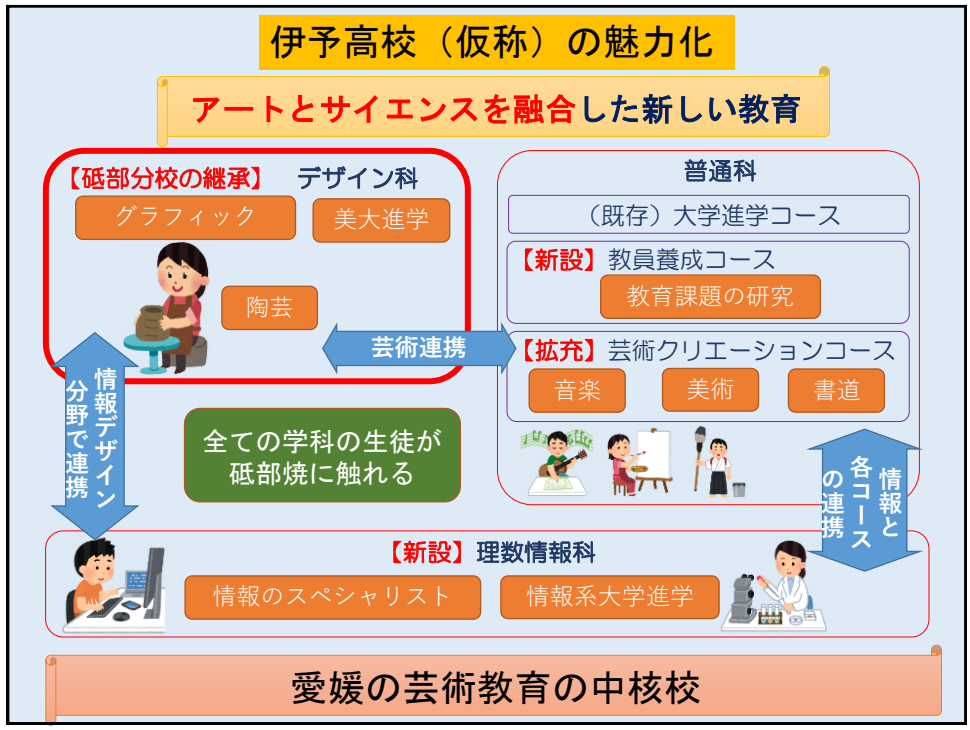
○普通科・デザイン科・理数情報科を併設したモデル校はありませんが、文系・理系に関わらず、普通科や他の学科と、芸術の学びを融合した教育は、全国各地に見られます。

○統合後は、普通科、デザイン科、理数情報科がお互いに連携した授業なども実施し、これからの時代に必要な力の育成を目指します。例えば下記のような連携活動が期待されます。

（例１）「書道パフォーマンス甲子園」への出場と全国制覇
・芸術クリエーションコース（書道）生徒のパフォーマンスを軸に
・デザイン科と理数情報科のコラボによる配色・構図など紙面構成の分析
・芸術クリエーションコース（音楽）生徒によるＢＧＭ制作　など

（例２）高校生によるゲームクリエーション
・理数情報科の生徒がゲームの内容をプログラミング
・デザイン科の生徒がＣＧを用いてゲームをデザイン
・芸術クリエーションコース（音楽）生徒によるＢＧＭ制作　など

○また愛媛県では本年度からＳＴＥＡＭ教育に取り組んでいますが、再編後の伊予高校では、本県唯一のアート（Ａ）を基軸に据えたＳＴＥＡＭ教育の実践校として取組みを進めていきます。


伊予高校（仮称）の魅力化
アートとサイエンスを融合した新しい教育
【砥部分校の継承】 デザイン科
グラフィック
美大進学
陶芸
芸術連携
普通科
（既存）大学進学コース
【新設】教員養成コース
教育課題の研究
【拡充】芸術クリエーションコース
音楽
美術
書道
情報デザイン分野で連携
全ての学科の生徒が砥部焼に触れる
情報と各コースの連携
【新設】理数情報科
情報のスペシャリスト
情報系大学進学
愛媛の芸術教育の中核校